

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02801

研究課題名（和文）地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築

研究課題名（英文）The Construction of a Participatory Dialect Database as Teaching Materials on Regional Diversity

研究代表者

井上 文子（INOUE, Fumiko）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・准教授

研究者番号：90263186

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：首都圏・関東・関西・大分・東北の8大学で、大学生を対象としたペア入れ替え式ロールプレイ会話の収録を実施した。「遅刻の連絡をする」「遅刻に文句を言う」場面を設定し、同性の親しい友人同士2名がペアとなり、電話で会話をおこなった。同一地域出身のペアの音声データ・文字化データは、個人情報処理をしたうえで、webサイト「方言ロールプレイ会話データベース」において、研究・教育に利用できる言語データとして公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「方言ロールプレイ会話データベース」は、共通のフォーマットに基づいて、複数の研究者が方言調査を実施し、その調査結果を言語データとして継続的に蓄積しつつ、研究・教育に活用することのできる「参加型方言データベース」である。誰でもアクセスできるようにweb上で公開しているため、地域の伝統・文化の教材として、また、談話展開・会話分析などの言語データとして、方言研究、国語教育、日本語教育、学校教育現場、一般の生涯教育などにおいても広く活用することが可能である。方言研究の立場から、方言データの活用方法と教材化のモデルを示すことは、新しい意義が認められるものである。

研究成果の概要（英文）：At eight universities in the Tokyo area, as well as the Kanto, Kansai, Oita, and Tohoku regions, role play conversations in which the participating university students switched roles were recorded. The scenes used were “participant notifies partner that they will be late” and “participant complains of lateness to partner.” Partners who were good friends and of the same sex were paired together and conducted the conversations over the phone. After processing for personal information was completed, the voice data and transcript data for pairs from the same region were published as language data on a website as a “Dialect Roleplay Conversation Database” that can be used in research and education.

研究分野：方言学、社会言語学

キーワード：方言データベース 方言教材 ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

日本方言研究会の創立 50 周年を記念して、2015 年から実施されてきた、日本方言研究会創立 50 周年記念企画「全国方言 YEAR 方言研究を未来につなぐ」は、「企画(1) 方言教材の開発と方言教室の開催」「企画(2) サマーセミナー：はじめての方言調査」「企画(3) 方言を介した地域支援活動」で構成されている (<http://dialectology-jp.org/>)。いずれも方言研究の応用的な企画だといえよう。企画(1)は方言と教育が直結したものであり、企画(2)も教育的要素が強く、企画(3)でも支援の一環として方言を子どもたちに伝えていこうとする試みなどがあり、広い意味で教育と関連が深い。これ以前にも、教育・医療・法廷などと方言に関する応用的な報告はなされていたが、特に、2000 年代に入ってから方言教材や方言教育に関する研究発表が増え、関心が高まっている。

研究分担者の小西いずみは、所属機関の大学生を対象としたアンケート調査を実施して、調査結果を「広大生の言語調査」(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/>) で公開するとともに、アンケート調査の方法と得られたデータを教育に活用するという実践的な取り組みをおこなっている(小西いずみ(2016)「アンケート調査実習を通して日常の言葉を日本語学の俎上にのせる」福嶋健伸・小西いずみ編著『日本語学の教え方 教育の意義と実践』)。また、研究分担者の日高水穂は、言語地図や昔話の方言データを教材として授業に活用し、方言を日本語と日本社会の多様性を体験的に理解させる素材として用いている(日高水穂「空から見る日本語」の授業実践「方言」を通して日本語と日本社会を俯瞰する)福嶋健伸・小西いずみ編著『日本語学の教え方 教育の意義と実践』)。あわせて、所属機関の大学生を対象としたアンケート調査も実施して、調査結果を「ことばの調査」(<http://hougen.sakura.ne.jp/hidaka/kotoba/index.htm>) で公開するとともに、授業にも取り入れている。

このように、方言調査のデータを教材・教育に活用することには、高い効果と意義を見出すことができる。そこで、地域的多様性の教材としての方言をひとつのデータベースに集約し、それを活用して、教材を開発し、方言教育に資する枠組みを策定する必要があると考えた。調査方法や調査項目などを統一した共通のフォーマットを設定し、そのフォーマットに基づいて、アンケート調査や面接調査などの方言調査を実施する。複数の研究者がそれぞれのフィールドで実施し、得られた調査結果を共有すれば、大量で多様なデータが入手可能である。調査結果は、言語データとして利用が容易なように整備し、継続的に蓄積していく。調査したい項目があれば提案して、共同で調査を実施することができ、方言に関心がある人なら誰でもデータを研究・教育に活用することのできる「参加型方言データベース」を構築することを計画した。

研究代表者の井上文子は、国立国語研究所(2001-2008)『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』の編集を担当し、その後も「方言ロールプレイ会話データベース」(<http://hougen-db.sakuraweb.com/>) の構築、「日本語諸方言コーパス」のデータ管理など、数多くの研究者の協力を仰いで、長期間にわたって方言データベースの整備・公開に携わった経験を有する。その際に獲得したノウハウとネットワークを生かして、「参加型方言データベース」を立ち上げ、広く提供する。貴重な言語資源を集約し、活用に向けて整えることが大学共同利用機関に所属する者の務めでもあると考えるに至った。

## 2. 研究の目的

・共通のフォーマットに基づいて、複数の研究者が方言調査を実施し、その調査結果を言語データとして継続的に蓄積しつつ、研究・教育に活用することのできる「参加型方言データベース」を構築する。

・地域的多様性の教材としての、方言教材を提案する。

・方言データを共同で収集・分析し、その有効活用としての教材化を目指す、研究者・教育関係者ネットワークを形成する。

## 3. 研究の方法

(1)「参加型方言データベース」の方針を定め、コンテンツとなる項目を選定する。「参加型方言データベース」は、質問調査によるデータと収録調査によるデータから構成する。質問調査によるコンテンツは、地域の方言事象、言語意識、言語行動など、アンケート調査、面接調査による方言データである。収録調査によるコンテンツは、自由会話、ロールプレイ会話、場面設定会話、基本例文読み上げ、昔話など、音声を伴う方言データである。なお、音声資料をデータベース化することについては、かつて編集に携わった『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』での経験や、これまでに受けた科学研究費「方言談話データベースを活用した表現法の変化に関する研究」「日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究」「方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究」などによる蓄積を活かしながら、調査項目・収録内容を検討する。

(2) 音声を得られる収録調査方式、目的の事象が得やすい質問調査方式、それぞれの特性を考慮して、質問調査・収録調査の共通フォーマットを作成する。また、複数の参加者が個別に調査を実施することできるように調査マニュアルを整備する。

(3) 方言データを共有するプラットフォームを構築する。参加者が調査項目を提案すると、それらを取りまとめて共通項目として集約する。各地でそれぞれの参加者が共通項目の調査を実施し、調査結果を提供すると、担当地域に加えて他の地域の結果も利用可能となるような枠組みを作る。そのためには、統一したフォーマットにデータを載せなければならない。データ提供のフォーマットには、方言の文字化方式、表記の標準化、対訳の方法、音声処理などについて、統一・整備が必要であるため、十分な検討をおこなう。

(4) 共通のフォーマットに基づいて、研究組織のメンバーが分担して、質問調査・収録調査など方言調査を実施する。

(5) 質問調査による結果、収録調査による資料を整備してデータベース化し、「参加型方言データベース」を構築する。「参加型方言データベース」は、共通のフォーマットに基づいて、複数の研究者が調査・収集した結果・資料を、言語データとして継続的に蓄積しつつ、研究・教育に活用することのできるデータベースである。

(6) 「参加型方言データベース」のデータに基づき、各調査地域の言語表現・言語行動・言語意識・談話の特徴・言語使用状況などを明らかにするとともに、地域間の対照方言学的分析をおこなう。

(7) 「参加型方言データベース」を活用することにより、地域的多様性の教材のモデルを提案する。教材は、全国の方言を概観するような全国版だけでなく、それぞれの地域の身近な項目を取り入れ、他地域との違いを実感することができるような、地域密着型の地域版の教材に力を入れる。教材化のポイントとしては、出現数が多く、バリエーションがあり、対象者が興味を持ちやすい項目がポイントとなる。最終的には、項目を取捨選択して賛成版を作成する。

(8) 研究成果としては、対照方言学的分析に関わる論文のほか、web で方言教材・マニュアルをオープンアクセスとして公開する。教材と教材を教育に活用した事例を紹介するための報告会、教材とマニュアルの活用を推進するための講習会を開催する。

(9) 報告会・講習会を通じて、方言データを共同で収集・分析し、その教材化を目指す、研究者・教育関係者のネットワークを形成する。大学生を対象とした方言教材に重点を置いているが、将来的には、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒を対象とした方言教材の提案に向けて、教育関係者とのネットワークを形成し、具体的な実施計画の策定を開始する。

#### 4. 研究成果

共通のフォーマットに基づいて、複数の研究者が方言調査を実施し、その調査結果を言語データとして継続的に蓄積しつつ、研究・教育に活用することのできる「参加型方言データベース」の構築を進めた。首都圏・関東・関西・東北・大分などの8大学で、大学生を対象としたペア入れ替え式ロールプレイ会話の収録を実施した。「遅刻の連絡をする」「遅刻に文句を言う」場面を設定し、同性の親しい友人同士2名がペアとなり、電話で会話をおこなった。

また、岡山などで、高年層を対象として、電話でのロールプレイ会話と対面での自由会話の収録を実施した。「文句を言う」「依頼する」「慰める」「勧誘する」「出欠の確認をする」「申し出る」場面を設定し、ネイティブで同性の親しい友人同士2名がペアとなり、電話で会話をおこなった。

同一地域出身のペアの音声データ・文字化データは、個人情報処理をすたうえで、web サイト「方言ロールプレイ会話データベース」(<http://hougendb.sakuraweb.com/>)において、それぞれ「大学調査」「地域調査」として、研究・教育に利用できるように、公開している。「方言ロールプレイ会話データベース」は、共通のフォーマットに基づいて、複数の研究者が方言調査を実施し、その調査結果を言語データとして継続的に蓄積しつつ、研究・教育に活用することのできる「参加型方言データベース」である。誰でもアクセスできるようにweb上で公開しているので、地域の伝統・文化の教材として、また、談話展開・会話分析などの言語データとして、方言研究、国語教育、日本語教育、学校教育現場、一般の生涯教育などにおいても広く活用することが可能である。方言研究の立場から、方言データの活用方法と教材化のモデルを示すことは、新しい意義が認められるものである。

研究組織のメンバーは、実践の事例として、ロールプレイ会話データを談話展開・会話分析の教材として有効活用し、教育活動に取り組んでいる。今後も、統一的な手法で得られた方言データを継続的に蓄積し、「地域的多様性の教材としての方言」を提案していきたいと考えている。

地域に密着した実践として、研究分担者の小西いずみは、独特なことばを持つ富山県下新川郡朝日町笹川の方言を調査・収録し、web サイト「富山県朝日町笹川の方言」(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/sasagawa/sasagawa.html>)において、実際に聞いて楽しみ、学べるように、音声とともに提示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井上文子	4. 巻 36-9
2. 論文標題 将来の研究のためのデータ作り 何を記録に残しておくべきか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小西いずみ	4. 巻 110
2. 論文標題 日本語方言における終助詞の意味・用法と体系：富山市方言・山形市方言・共通語の対照	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田晃子	4. 巻 173
2. 論文標題 災害時の方言とコミュニケーション：日本語教育と方言研究の連携のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター	4. 巻 6
2. 論文標題 公開展示報告「小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 149-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 大分方言談話から見た配慮表現の世代差と地域差
3. 学会等名 日本語学会2017年秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 方言研究と談話研究
3. 学会等名 大分県高等学校国語教育研究大会 2017県大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 大分方言を知る！
3. 学会等名 おおいたナイトスクール ふるさと知ろう科
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 おおいた弁について～決まり文句を中心に～
3. 学会等名 大分学研究会第47回例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 大分方言
3. 学会等名 おおいたナイトスクール ふるさと知ろう科
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター
2. 発表標題 公開展示「小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」
3. 学会等名 日本方言研究会第109回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 パネリスト：仁田義雄・杉戸清樹・大野眞男，指定討論者：山東功・金愛蘭・仲原穰，司会：竹田晃子，企画：竹田晃子・金愛蘭
2. 発表標題 公開シンポジウム「社会変動の中の日本語研究：学の樹立と展開」
3. 学会等名 日本語学会2019年秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田晃子
2. 発表標題 近代日本方言研究史にみるアイデンティティ
3. 学会等名 ひと・ことばフォーラム29「テーマ：言語とアイデンティティ」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小西いずみ
2. 発表標題 日本語方言における終助詞の種類・体系と表現特性
3. 学会等名 第56回表現学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KONISHI, Izumi
2. 発表標題 A pilot comparative study on sentence-final particles in Japanese dialects
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia (JSAA) 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 小林隆編 熊谷智子、篠崎晃一、中西太郎、小林隆、岸江信介、杉村孝夫、松田美香、久木田恵、太田有紀、琴鍾 愛、沖裕子、甲田直美、尾崎喜光、三宅和子、日高水穂、森勇太、井上文子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 コミュニケーションの方言学	

1. 著者名 東北大学方言研究センター編 / 太田有紀・大橋純一・川崎めぐみ・櫛引祐希子・甲田直美・小林隆・作田将三郎・櫻井真美・佐藤亜実・澤村美幸・椎名渉子・竹田晃子・田附敏尚・玉懸元・津田智史・中西太郎・吉田雅昭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 864
3. 書名 生活を伝える方言会話 [資料編・分析編] : 宮城県気仙沼市・名取市方言	

1. 著者名 竹田晃子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 東北方言における述部文法形式	

1. 著者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩手大学教育学部（科研費研究成果報告書）	5. 総ページ数 152
3. 書名 釜石 漁火の会があらほ弁で語る ふるさとの昔話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「方言ロールプレイ会話データベース」井上文子  <a href="http://hougen-db.sakuraweb.com/">http://hougen-db.sakuraweb.com/</a></p> <p>「富山県朝日町笹川の方言」小西いずみ  <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/sasagawa/sasagawa.html">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/sasagawa/sasagawa.html</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小西 いずみ  (KONISHI Izumi)  (60315736)	広島大学・教育学研究科・准教授    (15401)	



## 6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	日高 水穂 (HIDAKA Mizuho)  (80292358)	関西大学・文学部・教授   (34416)	
研究分担者	松田 美香 (MATSUDA Mika)  (00300492)	別府大学・文学部・教授   (37502)	
研究分担者	三井 はるみ (MITSUI Harumi)  (50219672)	國學院大學・文学部・教授   (32614)	
研究分担者	竹田 晃子 (TAKEDA Koko)  (60423993)	立命館大学・衣笠総合研究機構・専門研究員   (34315)	
研究協力者	酒井 雅史 (SAKAI Masashi)		
研究協力者	山田 豊樹 (YAMADA Toyoki)		